

修験道と霊山・霊場

－武蔵国の民間信仰の山々を楽しむために－

松本敏夫

登山の楽しみ方は人それぞれである。如何に登山を有意義なものにするかは登山者の考え次第とも云える。国土の約 70%が山岳地帯である日本では急峻な山容が特徴的な日本アルプスや富士山・御嶽山のような秀麗な独立峰は何処から登っても達成感や眺望が楽しめる。一方、奥武蔵、奥多摩、秩父の山々は古くから山麓に人々が暮らし、山・沢・森林は極めて身近な存在である。これらの山々は、明治期にスポーツ登山が始まる以前から村境の峠を越える生活のための道があり、祀られた神仏を参詣する信仰の山でもある。山麓の民俗行事や歴史を理解することは可憐な高山植物を観賞するのと同様に、山頂への道に思いがけない楽しみを発見でき、山登りが一層興味深いものになる。

山岳を修行の場として峰々に分け入ることで験力を身に付け、旱魃で困った時は雨乞いの祈禱を行い、疫病の原因を神霊の託宣で占い護摩や調伏を行う日本古来の信仰に修験道がある。標高があまり高くない山を楽しむための一つの方法として、「修験道と霊山・霊場」について紹介する。2004 年に世界文化遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる大峯奥駈道や熊野三山などは代表的な修験の山である。修験道及び山岳信仰は、修行場や神域に民衆がみだりに立ち入ることを禁じ、杉・檜の苗木の献木を奨励するなど、自然保護への貢献も見逃すことができない。



三峯神社・苗木献木の石碑群



武州御嶽山・表参道杉並木

【修験道の概要】

日本古来の信仰は自然崇拜（太陽、月、海、山、水、岩、滝、樹木など）や呪術信仰（死者の霊魂など）で、熊野三山、出羽三山、英彦山、信濃戸隠山、加賀白山、越中立山、伯耆大山、相模大山、常陸筑波山などでは古くから神霊が信仰されていた。奈良時代に仏教が伝来すると、自然崇拜・神霊信仰（神道など）は仏教（主として天台宗・真言宗の密教）、道教（庚申信仰、不老不死、仙人、風水など）及び陰陽道（占術、天文学、暦、呪術、災難回避など）などと混淆し、日本固有の民俗信仰である修験道が成立した。奈良時代から明治維新（慶応四年の神仏分離（判然）令と明治五年の太政官布告・修験道廃止令）までの千数百年間に渡り、修験道は日本人の一般的な信仰形態であった。修験道の本質は山に入り、峰々を縦走しながら神霊、祠、岩、水、滝、洞窟、樹木などの行場を巡る山岳修行

（抖擻：とそう）で験力を身につけ、加持祈禱やト占などを行う民俗的な信仰である。

【役小角（役行者、役優婆塞、神変大菩薩）】

役小角は修験道の開祖と位置付けられている。延暦十六年（791）成立の「続日本紀」の天武天皇三年（699）の条に、「葛木の呪術師役小角は、韓国連広足の讒言にあい、伊豆島に配流された。また、鬼神を使役して水を汲ませ薪を取らせ、命令に従わないと呪縛した。」と記されている。役行者像は、頭巾を被り袈裟をかけ、手には錫杖と経巻を持ち、岩窟に腰を掛け、前鬼・後鬼を従えた像で現わされる。「日本霊異紀」には、「空を飛び、鬼神を使役して、大和の金峰山と葛城山との間に橋を架けさせようとした。仙人となって天に飛び去った。」と記され、修験者と云うよりも呪術師としての役割が強調されている。

役行者は大峯山（山上ヶ岳）で修験道の本尊である金剛蔵王権現を湧出させたとされる。権現とは神仏習合の考え方で、本地（インド）の仏菩薩が日本では権（仮り）に神となって現れるとした本地垂迹説に基づく信仰である。吉野・山上ヶ岳から熊野三山に至る大峯奥駈道は役行者所縁の修行場と伝わり修験者にとっては最も神聖な縦走路である。



金峯山寺・役行者像



大峯奥駈道・聖宝像



金剛蔵王権現像

【修験道の組織】

江戸幕府は修験道法度を定め、全国の修験者は大和国・大峯山（金峰山・御嶽山）の峰入りを通じて、聖護院に属する本山派か醍醐寺三宝院が支配する当山派かのどちらかに所属することになる。大峯山・英彦山・羽黒山などは天台修験の枠組みで組織化された。

寛治四年（1090）、天台宗・寺門派園城寺の増誉は白河上皇の熊野本宮詣の先達となったことから、熊野三山の検校職に任じられ、聖を護った故に、「聖護院」を賜る。室町時代以降、熊野御幸の先達は聖護院大先達の役目となり、熊野修験を統轄した。本山派修験は熊野本宮を拠点に大峯山から吉野への奥駈道に入峰修行を行った。



本山派修験・聖護院



当山派修験・醍醐寺三宝院



箕面山・役行者像

真言宗・総本山醍醐寺三宝院の開山は聖宝理源大師（832～909 年）と伝えられ、醍醐寺

の名称は霊泉である醍醐水の湧き出る場所に寺を建てたことに拠るとされる。当山派修験醍醐寺三宝院は吉野に根拠を置き、当山は大峯山を「一乗菩提正当の山」と最高の道場と位置つけたことに由来する。当山派は、吉野から熊野へと抖擻を行い、大峯奥駈道の小笹宿を祈禱所として拠点を置いていた。

【修験者とは】

修験者と山伏とは同一の意味であり「山に伏し、野に伏し、修行すること」から山伏とも呼ばれる。歌舞伎の勧進帳で弁慶の装束が山伏姿であることは良く知られている。本山派と当山派による違いはあるが、一般的な装束は、金剛杖、錫杖、宝剣、鈴懸（すずかけ）、袴、結袈裟（ゆいげさ）、頭巾（ときん）、班蓋（はんがい）、笈、最多角念珠（いらたかねんじゅ）、法螺貝、螺結（かいのお）、引敷、桧扇、八目草鞋・手甲・脚絆等の特徴ある姿であり、不動明王の姿を現すとされる。山岳修行を通して、最終的には自然と一体になること、即身成仏を目指している。

【修験の聖地；大峯山】

奈良県の吉野・金峯山寺または天川村洞川・龍泉寺から山上ヶ岳への登山は修験道の開祖である役行者所縁の地である。当山派修験である醍醐寺の聖宝は吉野から熊野への大峯奥駈道を再整備し、中興したとされる。本山派修験は熊野から吉野へと大峯奥駈道で修行し、熊野から吉野への抖擻を順峰、吉野から熊野へは逆峰と云われている。吉野の金峰山寺本堂である蔵王堂には、巨大な金剛蔵王権現（三体）が本尊として祀られている。役行者が山上ヶ岳の湧出岩から感得したとされる蔵王権現は青黒の忿怒相で表される。権現とは権（仮り）の姿で現れることを云い、蔵王権現は釈迦如来・千手観音・弥勒菩薩が元の姿（本地仏）である。大峯奥駈道へは最初の門である銅の鳥居「発心門」、金峰神社には大峯四門の第二の門「修行門」、五番関の女人結界を越え、洞辻茶屋、鎖場のある鐘掛岩、第三の門「等覚門」を過ぎると断崖から身を乗り出し、縄で吊り下げられる捨身行の名残と云われる「西ノ覗き」、第四の門「妙覚門」を入ると大峯山寺（旧山上蔵王堂）に至る。



大峯山寺・蔵王堂



山上ヶ岳・湧出岩



洞川からの女人結界

天川村洞川の龍泉寺は弥勒菩薩を本尊とするが八大龍王を祀る当山派修験である。龍泉寺で水行後、清浄大橋の女人結界が登山口となり、洞辻茶屋を経て、修行門から表行場を越え大峯山寺（山上ヶ岳）に至る。現在では、吉野（蔵王堂）登山口よりも山上ヶ岳への行程が短い洞川（龍泉寺）が修験者達の主要な登山口となっている。

大峯奥駈道は大峯山寺のある山上ヶ岳から開始され、聖宝を祀った当山派修験の聖地で

ある小笹の宿、大普賢岳、行者還り、弥山山頂には天河弁財天の奥宮がある。大峯奥駈道の最高峰である八経ヶ岳、金剛界と胎蔵界との境である両峰分け（大峯山域を曼荼羅に見立てている）、釈迦ヶ岳、本山派修験の灌頂場所である深仙の宿、役行者に仕えた鬼（前鬼・後鬼）の子孫と伝えられる前鬼宿につく。最終的には熊野本宮に詣でて大峯奥駈道の抖擻は終了となるが、南奥駈道を笠捨山、玉置山、吹越山へと抖擻して熊野本宮に至る道も開かれている。



小笹の宿



深仙の宿



前鬼・小仲坊

【武蔵国の修験霊山・霊場】

○都幾山慈光寺：ときがわ町の慈光寺伝によると、天武天皇の白鳳二年（673）華嚴宗の開祖僧慈訓によって山岳仏教寺院として創建され、役行者が修験の道場を開き、鑑真の高弟である釈道忠により開かれたと伝えられる。鎌倉時代には幕府祈禱寺として繁栄し、都幾山一帯に七十五坊と云われる堂塔伽藍を擁する大寺院として隆盛を極めた。往時の修験者たちは秩父の峰々や富士山へ九十日間の回峰行を行ったと伝えられる（都幾川村の史跡と文化財・都幾川町教育委員会）。関東の天台系修験の拠点として蔵王堂及び木造蔵王権現立像を伝えてきたが、昭和六十年に火災により焼失した。坂東三十三観音霊場第九番札所である観音堂から都幾山へは十分ほどで山頂（標高 463m）につく。更に西へ稜線伝いに金岳（鐘岳）に至る。新編武蔵風土記稿の慈光寺の条に「鐘岳と伝あり、是は當時右大将頼朝納められし鐘を掛けし所なりと云」と記され、鐘を寄進し武運を祈った頼朝の信仰と隆盛を誇った慈光寺の輝かしい歴史や伝説を今に伝えている。

○越生山本坊：草創は越生町の黒山三瀧（男瀧・女瀧・天狗瀧）及び熊野神社、本山派修験の道場であり、入間・比企・秩父三郡、常陸・越後（一部）の年行事職大先達であった。天狗瀧の上部を通り大平山への登山道を辿ると、「大平山の役の行者像」の標識が現れる。山本坊第一の聖地と云われるこの場所に、西戸村講中（現毛呂山町）が奉納した役行者像及び前鬼・後鬼像（元治年間）がある。熊野神社は古くは将門宮と称し、平将門の後裔との伝承が残る栄円（箱根山別当相馬掃部介時良）により、関東の熊野霊場として応永五年（1398）に修験道場（越生山本坊）を開いたと伝えられる。新編武蔵風土記稿の越生郷の条に「熊野神社：慶安二年社領三石の御朱印を賜ふ、当社は西戸村山本坊の進退する處なり」と記されている。

○笹井観音堂（梅之坊）：瀧音山白山寺梅之坊と称し、入間川から瀧不動を含む広大な範囲を敷地とし、本山派修験として入間・多摩・高麗三郡の年行事職（支配寺院は五十五ヶ

寺)であった。笹井の地名は大峯奥駈道の聖地である小笹の宿に由来すると推測されている。観音堂には十一面観音、護摩壇、錫杖、役行者の木像を安置する。文明十八年(1486)、聖護院門跡・新熊野検校の道興准后が北陸・関東の諸国巡錫の際に、武蔵国の笹井観音堂を訪問したことが「廻國雜記(文明十九年:1487年)」に記されている。室町時代には北条氏照の命により配下の修験者を小田原に参陣させるなど緊密な関係を保持したが、豊臣秀吉に敗れ広大な支配地を失ったことが、観音堂の笹井家古文書から推測される。



慈光寺・本堂



大平山・役行者像



笹井観音堂・役行者

○武甲山：古くから秩父の山岳信仰の象徴的存在で神奈備山である。山名の由来は、日本武尊が東征の折、武甲山頂に甲冑などの武具を岩蔵に納めて関東の鎮守としたとの伝説による。新編武蔵風土記稿の秩父郡の条に「武甲山 郡の南寄りにあり、此山は横瀬、大宮上下、影森、裏山上下、名栗の七ヶ村に跨れり、一名は妙見と唱へしと伝、一説に古へは武光山と書けるかいつ頃よりか日本武尊の説に因循して光と甲と同音なるゆえ今の文字に改替たる由」と記されている。南北朝時代に秩父の武士達が熊野修験に帰依するようになり、山頂に蔵王権現及び熊野権現が祀られる。一ノ鳥居及び山頂の御嶽神社奥社には狛犬のお犬様像(山犬像、狼像：昭和初期に奉納)があり、狼信仰(狼の護符・狼像)の寺社として知られているが、狼の護符の配布は確認されてない。室町時代に成立した秩父三十四札所(観音霊場巡り)には修験の関与が推測される。

○三峯山：三峯神社の表記は古くから「三峰」ではなく「三峯」である。役行者が伊豆配流の折、三峯山で修行したと伝えられ、江戸時代には神仏習合の山岳霊場として聖護院門跡の直末となる。天台系修験の関東総本山として三峯山観音院・高雲寺と号し、三峯大権現を祀る。「当山大縁起」によると、景行天皇の代、日本武尊が東征の途中、甲斐国酒折宮から雁坂峠を越えて当山に登り、遥かに国中の地理を見渡し、神威の擁護を願い、仮宮を造営して、イザナギ・イザナミの二神を祀ったとされる。その後、景行天皇は東国巡幸に際し尊の戦跡を訪ねてこの山に登り、三山(雲取山・白岩山・妙法ヶ岳)の高く聳え立つことを見て「三峯宮」の称号を授けたと伝えている。三峯修験の山岳抖擻の経路は明らかではないが、雲取山(那智大社から熊野本宮への大雲取・小雲取越え由来か)、飛龍山(那智の飛瀧神社由来か)、牛王院平(熊野の八咫鳥をデザインした牛王宝印の護符由来か)、笠取山、甲武信ヶ岳、国師ヶ岳、金峯山(吉野の金峯山由来と考えられ、蔵王権現を祀る)に至る稜線(聖域)を縦走(抖擻)した可能性が、現在に伝わる山名・地名から推測される。三峰山博物館には、役行者像、三峯大権現、不動明王像等

が保管されている。三峯神社の繁栄は享保五年（1720）に入山した日光法印が守護神として狼（山犬）の神札を発行して三峯講の拡大を図ったことに起因する。三峯神社では狼をお犬様と呼んで崇敬し、稲荷神社の狐と同様に、この狼のことを一般に御眷属と称する。「三峯山大縁起」には山の神として大山祇神が祀られ、その使者として狼が記されている。

○両神山：埼玉県西部に位置する両神山は秩父古生層からなる固いチャートの山で、鋸歯状（龍の飛ぶ姿とも見える）の特有の山容で知られる。山名の由来は、日本武尊東征の際に当山に登り戦勝を祈願し、イザナギ・イザナミの二神を祀ったことから両神山と呼ばれるようになったと伝わる。または、日本武尊がこの山を見ながら通行するのに八日間かかったことから八日見山（新編武蔵風土記稿）、龍神山（りゅうかみやま）、龍頭山（龍登山）などとも呼ばれる。深田久弥はヤ（八）オガミ（大蛇）で、八つの頭を持った龍王から龍神、龍頭が導かれ、両神と変わったと日本百名山に記している。両神山（標高 1723.0m）は切り立った岩場を露出し、無数の滝や豊富な水源などを特徴とすることから、水の神である龍神が棲む山としての信仰から龍神山になったのではないかと推測される。古くから山岳信仰の対象として修験霊山であったとともに、三峯山や武甲山と同様に山犬（狼）信仰で知られ、神社、祠、石仏、石像、御嶽信仰の霊神像等が多数残されている。

○武州御嶽山：当山派修験である醍醐寺三宝院の末であり、鎌倉時代には御嶽大権現として崇拝されるようになった。新武蔵風土記稿の御嶽社の条に、「日本武尊東征の折、武蔵国から上野国に向かう途中、道を塞いでいた白鹿を倒した。その後、霧に巻かれ道に迷った際に白狼が突然現れて御嶽山への道案内をしたことから火難盗難退除の守護神となった。また、尊が身に着けていた鎧を脱ぎ岩倉に納めた国であることから武蔵国の国号となった。」と記されている。聖武天皇の勅願により行基が東国へ下った時に、御嶽山に登り蔵王権現の像を彫り安置したと伝わる。御嶽山の山名は武蔵国の蔵王権現信仰の中心であるとのことで、吉野の金峯山に因むものと考えられる。武州の金峯山であり、国御嶽（大峰山・御嶽山・金御嶽）とも呼ばれる。



三峯神社



両神山



武州御嶽神社

プロフィール：松本敏夫 1949 年埼玉県上尾市生まれ、学習院大学理学部化学科卒、製薬企業で薬物動態研究に従事（第一種放射線取扱主任者）、日本山岳会会員、日本山岳修験学会会員、新版日本三百名山登山ガイド・改訂新日本山岳誌（一部分担）